母語話者による母語話者ロールプレイング発話の評価からわかること
-「意味」と「流れ」に関する肯定的コメントを中心に-

名嶋義直

東北大学大学院文学研究科

１．研究の背景

これまでの母語話者評価研究は主に「母語話者が学習者の発話をどう評価するか」という観点から行われてきた。[1]それらを通して多くのことが明らかになったが次のような疑問も生じる。母語話者が母語話者の発話を評価する時も同じような点を評価されるのだろうかという疑問である。また，多くの学習者にとって評価者としてより一般的なのは非日本語教師であることを考えると，非日本語教師の評価をもっと参考にすべきではないだろうかという疑問も生じる。これらの問題を解決するためには「母語話者による母語話者発話の評価」を調査する必要がある。しかし，そのような研究は管見の限りほとんど行われていないように思われる。そこで「母語話者が母語話者発話のどこに着目してどう評価するか」について考察することとした。

２．調査の概容

調査はロールプレイングビデオを視聴し，その感想を自由に記述してもらう形で行った。調査場所はＡ大学，日時は 2007 年 9 月 11 日，集中講義の一時間目の最初の活動として行った。[2]評価者はＡ大学の４年生 16 名（日本語教育関係 14 名，その他２名）である。

調査は以下の形で行われた。まず「肯定的」「中立的」「否定的」の３段階に区切られた回答紙を配布し，母語話者によるロールプレイイングビデオを視聴した後で肯定・中立・否定の該当する場所に気がついたことを自由に記入するよう指示した。肯定・中立・否定の選択は自由，複数回答も可であることを説明した。説明終了後，ビデオを再生しコメント記入してもらった。

ロールプレイイングの内容は「レポートの締め切り延長願い」,「教員とのアポ取り」,「アルバイト先への問い合わせ」,「友人への引っ越し手伝い依頼」の４場面である。ビデオは１クリップ２分前後で，全部で 10 クリップを視聴してもらった。１回答には３分前後をかけた。

３．調査の結果

3.1　「意味」に関するコメント

---

[1] たとえば，小池真理（2004a），小池真理（2004b），渡部倫子（2004）など。

[2] したがって，集中講義の講師である筆者は調査協力者に対し，「どういうところに着目するか」といった評価の観点について一切言及していない。以下の評価項目は調査協力者が独自に着目したものである。

3.1.1　「必要な情報や意味が過不足なく伝達されていること」を評価する

（1）理由をちゃんと言えている

（2）用件を最初に述べたことで何を話したいのか明確になった

これらの例はこれまでの母語話者評価研究であれば「談話構成」とか「因果関係」とか「前置き」とかいった分類をされるものである。しかし（1）のコメントから読み取るべき口頭コミュニケーション文法は「理由を述べる」という皮相的なものではなく「説得力をもった説明を行う」というものである。「理由を述べる」のは手段に過ぎない。「相手に分かってもらいやすいこと」が重要だと言っているわけである。同様に,（2）のコメントは「前置きの使用」を肯定的に評価しているというより「話がわかりやすかったこと」を肯定的に評価していると読むべきである。話がわかりやすかった理由は「会話の早い段階で『何を話したいのか明確になった』ためどういうコンテクストで会話を理解すればいいかが分かった」からである。

母語話者評価を日本語教育に活用していく際には「どこがどうなっているからいい」という事象面での記述を積み重ねていくだけではなく, 評価者のコメントの中から「どこがどうなっていると『どういう理由で』いいのか」という論理構造を探し出していくことが重要であろう。

3.1.2　「意味の伝達を確実にするために積極的な試みを行っていること」を評価する

（3）声の強弱を大事なところだけ大きくしていた

（4）大事なところを繰り返して伝えていたところ

（5）返事が「はい」だけではなくその後に言葉が続くので余計な質問をしなくていいのがよかった

やみくもに声の強弱を変えても意味はない。何でも繰り返せばいいわけでもない。（5）のような「会話の発展」（小池 2004a）もただ行えばいいというものではない。相手が求めている内容と無関係のことを「発展」させても却って分かりにくくなるだけだからである。これらの行為が肯定的に評価されるのはそれが「意味の確実な伝達に寄与する場合」だったからである。

これらのコメントが言及している行為はこれまでの母語話者評価研究であれば「コミュニケーションストラテジー」に分類されるものであろうが, 口頭コミュニケーション文法においては「それらの行為が行われること」が重要なのではなく「意味の確実な伝達に寄与する」からこそ重要なものとなる。過度に形式に重点を置いた会話の教育は当該ストラテジーの使用そのものに意味があるかのような誤解を学習者に与えるおそれがあるのではないだろうか。口頭コミュニケーション文法の記述は「意味の伝達」という観点から行われるべきである。

3.2　「流れ」に関するコメント

3.2.1　「構成に関すること」を評価する

（6）会ってすぐ依頼にはいるのではなくて世間話をして会話を膨らませてから本題に入っていったのがよかった

（7）先に今週空いているか聞いてからお願いするのは良い方法だと思う

（8）頼む内容を先に言っていたのはよかった

（9）最後に内容の確認ができていた

これらのコメントには「なぜいいのか」ということは書かれていない。しかし，「何を」「どんな順番で」ということは言及されている。母語話者が「談話構成面における流れ（何をどんな順番で話していくか)」に着目していると考えられる。面白いことに，（8）のコメントは「意味」で取り上げた（2）と非常によく似ている。しかし，（2）では「何を話したいのか明確になった」ことが理由で評価されていた。これら2つのコメントを関連させて考えることで，「要点を先に述べること」は「談話開始後の早い段階で何を話したいのか明確にさせる効果」があり「その後の談話の理解を促進する」ことになる，それゆえに「先に言う」ことは「スムーズな談話の流れを形成する」ものとして肯定的に評価される，と考えることができる。

3.2.2　「話す速度に関すること」を評価する

（10）声の速さ

（11）ジェスチャーも交えていてメリハリがあった

（12）間の取り方がよかった

（13）話の流れがテンポ良く進んでいた

上のコメントからは「速さ」・「メリハリ」・「間の取り方」・「テンポ」といった点が評価対象になっていることが分かる。しかし，どのような話し方が「いい速さ」であり「メリハリ」があり「間の取り方」がいいと判断されるのかは分からない。ただ，それらはもとのビデオと対照させて考えればある程度確定できるであろう。また，次のようなコメントも参考になる。

（14）「元気だった？」「なにしてんの？」「何学部？」会話がテンポ良く進む

そのコメントから想定できる場面は「小刻みなターン（発話権）のやりとり」である。つまり「テンポ」というのは「相手とのやりとりが停滞しない」ということであると考えられる。(14)のように次々に質問してもそれだけで「会話がテンポ良く進む」とは限らない。相手が答えてくれなければ会話が滞るからである。つまり，「テンポの良い会話」というのは「会話参画意志をもって会話当事者が『意味的に噛み合った発話と応答』という行為を行うこと」によって実現されるのであって，決して会話の物理的な速度のことだけを言っているのではない。

次のコメントも「なぜスムーズだといいのか」という疑問に1つの回答を与えてくれる。

（15）会話の流れがスムーズで聞きやすい

「流れがスムーズ」ということは「聞きやすい」，つまり，「意味が確実に伝達される」という

ことにつながっているのであろう。「スムーズであればいい」ということではない。スムーズであっても何かが影響して意味の伝達が確実でなければわかりにくくなってしまう。「時間的な面でのスムーズさ」は「わかりやすさ」を支える１つの要因であって全てではないということである。なお，言うまでもなくここで言う「スムーズ」とは「会話当事者が『意味的に噛み合った発話と応答』という行為を『意味の伝達という点において滞ることなく行う』」という意味であって，必ずしも「物理的な速度のこと」を指しているのではない，と考えるべきである。

４．まとめ

小林（2004）は,「意味」や「流れ」に関する肯定的なコメントには「抽象的・全体的」なものや「引用を伴わないもの」が多く，それが教育への還元に困難させていると述べている。発表者はそれに加え,「言語学的視点」から何らかの評価項目を探し出そうとすることも原因の１つではないかと考える。「言語学的視点」に立った分類と考察から一旦離れ，評価者のコメントをありのままに見つめ,「複合的な考察」を行うことが重要であると考える。そうすれば，全てではないにせよ,「抽象的・全体的」なコメントを活用していくことが可能になるであろう。

参考文献

小池真理（2004a）「日本語母語話者は第二言語話者との会話をどのように評価するか」，研究代表者 小林ミナ,『日本人は何に注目して外国人の日本語運用を評価するか』(課題番号 12480058) 平成 12～平成 15 年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(2)研究成果報告書（以下,「同科研報告書」と略す），pp.126-139.

小池真理（2004b）「会話の参加者はどのように自身の会話を評価するか−母語話者と第二言語話者による評価の比較−」，同科研報告書，pp.140-163.

小林ミナ（2004）「『プラス評価』と『マイナス評価』の質的相違からみた教育現場への還元可能性」，同科研報告書，pp.275-285.

名嶋義直（2007）「自然な日本語を教えるために教師は何に着目すればいいか−日本語教育関係を学ぶ大学生による評価を手掛かりに−」, 平成 19 年度日本語教育学会第３回研究集会予稿集, pp.53-56（2007.6.16，於 岐阜大学）.

----（2008a）「日本語母語話者による日本語母語話者会話の評価からわかること」，沖縄県日本語教育研究会 2007 年度第３回例会口頭発表配付資料（2008.3.1 於 放送大学沖縄学習センター）.

----（2008b）「母語話者による母語話者ロールプレイング発話の評価からわかること」，日本語教育学世界大会 2008 予稿集２，pp.243-246（2008.7.11-13，於 釜山外国語大学校）.

渡部倫子（2004）「日本語母語話者は何に着目して発話を評価するか」, 同科研報告書, pp.76-93.